

月曜礼拝の法話 『弱いあなたを救うほとけさま』

盆法要にみなさんようこそお参りです。お寺にお参りするというのは、私をいつも見守ってくださっているほとけさまにお礼を言うということです。なぜなら、人間とは弱いもので、落ち込んだり調子に乗りすぎたりして、失敗してしまうからです。失敗して悲しむのが人間ですから、弱さのある人間をすくうほとけさまを大切にするのです。ここで一つのお話をします。

『四人の若い魔法使い』

ある町にえらい魔法使いの先生がいました。そこで四人の若者が魔法の使い方を勉強していました。二年、三年と勉強をし、少し魔法が使えるようになりました。

ある日のこと、四人のうちの一人が「そろそろ都へ行って王様に仕え、魔法の力でいい仕事につきたいものだ」と言いました。「うん、それはいい、おれも、この貧乏暮らしはあきあきしている」別の男がそう言うと、もう一人も「おれもそう思う」とあいづちを打ちました。

ところが、四人目の男は何も言わないで、だまりこくっていました。すると最初の男は「おまえは、おれたちの考えに反対なのか」とにらみつけるように言いました。

「いや、都へ行くのに反対ではない。ただ、少しぐらい魔法が使えるようになったからといって、人にそれを見せつけるのはいやだ。何か悪いことが起こるような気がする」

二人目の男が「まあまあ、そんなにむきになるな。おれたちは仲の良い友達じゃないか。ここでの生活はここまでにして、みんなで都へ出かけよう」そう言うと四人目の男もそれに従って、都へ出かけることになりました。

いく日か旅を続け、ある森の中を通りかかったときのことです。がっちりとした骨が散らばっています。頭の骨を見て「これはライオンの骨にちがいない」と男たちは思いました。

「これはいいものを見つけた。おれたちは不思議な魔法を使うことができる。魔法のはたらきを試してみようではないか」

「このばらばらの骨を使って、みんなでライオンを生き返らせるのだ」

「それはおもしろい」二人目と三人目の男も賛成しました。「じゃ、おれは、一番先に、骨をつなぎ合わせてみせる」一人目の男は目をつむり。口の中で呪文を唱え始めました。するとどうでしょう、ばらばらになっていた骨が生きているかのように動きだし、つぎつぎつながってライオンの骨の形になりました。

「これはすごい。ではつぎはおれがやってみよう」

二人目の男も、目をつむり呪文を唱え始めました。するとどうでしょう。ライオンの骨格の上にもるみる肉が盛り上がり、皮ができ、毛も生え始めました。

「すごいすごい、すばらしい魔法の力だ」三人目の男も驚きの声を上げ

「よし、今度は死んだライオンに命を生き返らせてやる」目を閉じ、呪文を唱え始めました。

それを見た四人目の男は言いました。

「やめてくれ、ライオンが生き返ったらおれたちは食べられてしまうではないか」

「いやいや、生き返らせないと、おれたちの魔法の力を試すことにならない」

四人目の男は、急いで木の上によじ登りました。ところが、後の男たちは誰も気の上に登ろうとしませんでした。呪文の最後の言葉が途切れるとライオンは生き返り、「うおっ」と大声で吠えました。その声を聞いて男たちは大慌てで木の枝に登ろうとしましたが、ライオンは三人の男たちにおそいかかり、餌食にしてしまいました。

四人目の男はそれを見ながらどうすることもできず、「ああ、ひどいことになった。何ごとも先のことをよく考えてしなければならぬ。魔法の力がわざわいをよんでしまった」しみじみと言いました。